形式の豊かさは無限の内容を取り入れ得るところに存し、内容の豊かさは無限の形式に入りこみ得るところに存する。二つの無限が相合ふところに有限なる形象が生れる――これに依つて二つの無限は、形式を與へられた内容として見られる凡べての存在の周圍に漂ひ一切の存在をして無限なるものの象徴たらしめる。

――ジンメル――

歩道 六月號 目次

短歌作品

歩道へ……齋藤茂吉（一）

其一……（四）

其二……（一六）

雨の歩道……新村出（二）

形式（純粋短歌論II）……佐藤佐太郎（一四）

朝の螢研究（一）……（二二）

橘馨・關口登紀子・猪浦敏夫・佐藤武

歌壇時評……田中仁（二五）

極點……今宮武雄・佐藤武（二七）

後記……佐藤佐太郎・佐藤武（二八）

歩道へ

齋藤茂吉

家ごもりしづまり居れどうつせみの老びとなれば病むときに病む

界隈に啼くうぐひすを飼どりと錯まり聞きしこの三朝四朝

あつまりて歌をかたらふ樂しさはとほく差しくる光のごとし

かしの實のひとり心をはぐくみてせまき二階に老いつつぞゐる

いやさらに老いしがごとく出でくれば三月盡の道氷りけり

春雨の歩道

新村出

名もなつかしき春雨一過、春興たけなはな花祭の日に筆をすすめる。歩道と題する現代的な新誌の創刊を、親しき三鷹をとめから報じ來て、一筆何か書いてと賴まれたときは、ここらあたりに蕗の花芽が生え出したての、まだ塔も立たない上春のころで、近所の梅も綻びそめない時分であつた。あの淺綠りでいくらか薄紫のニュアンスを帶びた苞を手にとつて結城哀草果の

霜とけて粗くほぐれし土の面に蕗のたうおほく萠えいでにけり

の歌をはじめ、かねて憶えてゐた平福百穗畫伯の寒竹に存する連吟七首、その白田舍の蕗のたうをも詠んだ哀草果が、同塾の吟をも山麓の集に見出して、ひとり悅に入りつつ、むかし實家の母が靜岡の隱棲居で、この蕗のたうを刻んで、朝の味噌汁にいれて食べてゐたことをも思出した。

蕗の塔となると、何やら俳味の方が先立つので、さみどりに紫あはし蕗のたう、不精さや取り寄せて見る蕗のたう、蕗味噌や紫影のわびをはうふつす、などと駄句が忽ち萠え出たが、歌は遂に一首も詠めず、現代歌人の作を愛誦したばかりことしの勅題の春山には、きさいの宮のお歌にさへそれが現れたではないか。破天荒と申してもよからうと思ふ。

ふきのたうつむ手やすめて春霞たなびくをちの山をみるかな

けふ九重の御苑ににほひぬる蕗の塔を、その岡に茶つます兒と、みふぐしもたせられて摘みませる構圖は、想像してみても上代の純樸を感ぜしむるではないか。老人は、おみおつけの中に淺綠りの蕗の芽をみながら、かういふ空想から、だんだん歌集句集、古今の辭書などへと、風流心が智識慾へと轉向したありさま。

そこで歩道の歌人、佐藤佐太郎さんの集を久々にとり出して、もしや蕗のたうが詠まれてゐないかと一閲する。私の好きな樹木で、欅と公孫樹が各九首、杉が七、椎が三、樟が二、櫻が一、そして老人むきの木炭が六つ、これもありがたい。しかし蕗の塔は一つもなかつたが、私が心をとめてゐた空を五十三首みいだし、而も街空が七首、それは他の作家に例のない見方であることを感じて喜んだ。

さて田園から都會へと眼がうつり心が向きなほつた老人はふと十年近い昔、奉祝展で見た勝田哲畫伯の名作、雨の歩道の一幀を想起した。畫題は、或は鋪道であつたかも知れぬと老妻にもたづねて見たが、たしかでない。勝田氏は、人も知る春擧門下の俊才、美人畫をも能くし、私をして屢々東京の

清方翁を連想せしめる。そこで松が崎に、久しぶりに同氏をおとづれて、その畫の色ずり繪葉書を見せてお貰ひしたが、構圖も姿態も私たちの記憶と相違しないが、畫題は「雨」とあつた。しかし歩道、鋪道、いづれの名もふさはしいが、京都の中心を外れた、例へば烏丸通りのかみの方、御苑の西あたりの、閑散な鋪裝した道路の場面。前面の蛇の目傘の和服の少婦、コオトを着て奇麗な妻革の塗下駄をはいたのが、歩道から車道へと二三歩進んだつつましい風姿、畫面で左から右へと向ふところ、その後面は、パラソルか、それとも文字どほりのパラプリュイかアントウカアか、とにかくカウモリ傘をさした女學生風の洋裝の少女が、それこそ颯爽として大股の濶歩で、今しも逆に車道から歩道へと二三歩急ぐスマアトな樣子、包みをかかへて女專から家路へ向ふところか。その全貌が、雨にぬれた車道の鋪裝面に搖影して映つてゐる。その影の上部、いはば胸部から頭部へかけたあたりを、コオトの和裝が履んでゆく形になつてゐる。後面の洋裝はすべてが黑一式、前景の和裝は茶色の澁みがち、これも傘から履物まで統一した色合ひ、靜けき春雨のもと、目をさへぎる一本の街路樹も描かれてない。女性二人の往きちがふ距りも正に三四歩ほど、印象の對照は極めて鮮明であざやかすぎる位ゐあざやかである。奉祝展で老人夫妻で觀賞してから以來程經た春さき、勝田畫伯と天草をかたり天草四郎をかたり、雜談に夕陽近くなつたので辭し去つた。路傍のヴェロニカ、英俗スピイドウエル、日本では俳味ある大いぬふぐりの名で知られてゐる碧色の草花が、もはや咲き出したのを愛しながら家路に就いた。夕方のためか、雲雀の聲は耳に入らなかつた。

萠え始めた垂柳の煙りの糸、白皚々たる木蓮のシャンデリア、春の蒼き街空に映じて、くつきりとおのがじゝの色々を發揮してゐる。老人も生をとりもどして、北大路の歩道をくわつぽして電車に乘つた。幸ひにもすいた車で、舊知の二三者と歡話する好機をも得た。春はたのしい。春はうれしい。

岸田劉生著
藝術と人生に就ての手記　定價一一〇圓　送料一〇圓
佐藤佐太郎著
歌集立房　定價七五圓　送料一〇圓
東京都港區青山南町五ノ九〇　永言社

作品　その一

○　東京　關口登紀子

寒土に韮のみどりの萌ゆる日をやうやく吾れの病いえたり
前丘の麥のなぞへが寒木立とほして朝な夕なに見ゆる
三月の風のつめたく晴れし日を麥の若葉はなべて耀ふ
畫近くなりし巷は乳色の霧がはかなく晴れてをりけり
莖あかきはうれん草を茹でてゐる思はぬときに幸のあり
道の邊に草のごとくに麥萠えてまともに春の入日が射せり
くぐもれるこの燒跡に耕しし土黑くして春近からん
この朝降る春の雨しげからず麥の若葉は露をとどめて
丘くだりくれば部落にひたすらに濃き紅の梅の群花
しろがねのみ髯清しく老いたまひし君のへに吾が心つつまし

父入院す。二月二十五日二首

春曇る寒きこの頃精神科病室にゐる父を歎かふ
裾濡れて雨ふる午後の病院に父のやまひを見に來し吾は
この朝のこころただよふ如くにて甍に細き雨のふる音

○　東京　佐藤　武

おもむろに夜の空晴れてゆくさまを墓ある木立の上に見放つ
晒されてゐる如く遠き感じにて微熱ある吾に風あたたかし
思ひ悶ふることも幾夜か過ぎゆけば湯婆に足をのせて眠りぬ
物の影さすこともなき墓石の後を照らしゐる冬の月
冬の日はみづから燃ゆる紅にとざさるる如く雲に沈みつ
病ある徵候として寂しめりゆふべの部屋に頰ほてりつつ
おぼおぼとしたる不安に夕暮れてしきりに潜く鴨を見て立つ

○　横濱　長坂　梗

いましばし殘る光に凌宵花の花たわわなる下に來てたつ
振動により雖える記憶とも眠を閉づまれに坐りし汽車に
窓あけて寢しかば白む曉に湧井あふれてゆく水の音
海鳴りの如く寂しく樹にこもる風ある夜半にひとり起きをり
一っ一っが黑き目をもちさながらに小さき魚のしらすを食ひぬ
いたく心萎えて臥すものか西に日が廻れば西の雨戸を閉づる
夜の空の色やはらかくなりたりと吾が仰ぐときあまき花の香

○　横濱　猪浦　敏夫

街屋根の上にし見ゆる陸橋にてかてかと日が照る畫つ方
畫すぎの庭に下り立ち遊ぶ子よ土に小さく影引きながら
爭そひし後の心の果敢なきに出づれば街は埃立つ風
畫食の鐘がひびけば機械停めて油ぼろ焚く幾ところにも
夕ぐれて歸り來たれば食卓の前に坐りて吾が子は小さく
デモ行進終りて人ら立ち去れば靜かになりて吾も歸らむ
誰も彼も心苛立ち來るとき結論をつけろと一人が叫ぶ
妥協點見出ぬままに夕ぐれて遠くに低く勞働歌聞こゆ

○　名古屋　石黑　柾吉

街にいでて孤り歩みをうつすとき沙塵を卷けり春の疾風は
騷立てる小さき店舗に目的もなく寄りのぞく燒飯を炒る
デパートの雜誌賣場に近づくに誰も彼もが只讀みしゐる
君が受持つエレヴェーターにゆくりなく乘れば間もなく昇りゆく
言ひ難き心づかれに歩めれば燈がつき燈がつく店々に

○　靜岡　長澤　一作

畫の日にぬかるみしかど夜に入りて再び凍る道を來にけり
ふつふつと鳥肉煮えて吾に湧く思ひは燒けし夜にかかはる
小路より出でて來しとき冬の日に耀く赤き屋根吾に見ゆ
冷ゑびゑと月照る鋪道を歩み來て吾が焦躁はしづまりゆかん
何といふ事なく一日終る夜に毒殺事件の記事われは讀む
朝あさに來れば枯芝に霜白し惰性のごとき吾のつとめか
うるほひのなき心にて歸りくる夜更けの道の土凍りゐて
更けゆきて風絶ゆる時吾が部屋に聞こゆる水の音はやさしも
朝明けし富士の頂にひとつ雲風に亂るるごとく見えをり

○　東京　山本　成雄

ふる如く霧立ちくればいちはやく店片附けて暗し鋪道は
指尖にかすかに韮の臭ふにも貧しき命愛しみゆくべし
たゆき身をはげまし歩む鋪道には捨てし茶殼が凍りつきたる
わが屋根のトタンを鳴らし吹く風を遠き警鐘の如く聞きゐつ
白鬚の長くし給ひしゆゑよしを言ひたまふ諧謔一つまじへて
河原は蒲生ことごとく枯れふして對岸の泥乾きたる見ゆ
枯蘆を焚く幾ところ見つつ來て堤防よりも低き君が家
堤防をこえて夕陽のさしくれば鐵さび色の放水路光る
河原に入りこみし水のあたりより湧くかと思ふ夕さむ靄は
雲低く垂れし河原をひとり行く夜ふけて五位鷺の聲も聞えず

○　東京　橘　馨

とりとめも無き空想に耽る時この丘の上を双胴機過ぐ
壁にもたれ楊子を用ゐ居る吾の膝に聲なく猫が寄り來ぬ
風持ちて道に遊べる幼兒が冷たき手にて吾にまつはる
つとめ路の吾の行手に大菩薩嶺が眞白く見ゆる今日の朝よ
冬庭の篁のなか掃きしとき探せしまりが凹みてぞ出づ
海隔て天城の見ゆるこの丘にからたちの實をわれは拾ひぬ
富士が嶺は全けきかなや砂濱に冬かぎろひの立つ朝にて
かの丘に香に立つ蜜柑咲かむ頃再び訪はな豐穰庵を

○　千葉　田中　仁

冬海は彫りたる如く動きなし雲くれなゐにもゆる夕ぐれ
遠き岬赤崩色にくもれるに光なきひるの渚踏みゆく
貝ボタンセーターの上に光りゐて渚行く手に林檎を持ちぬ
防風の花あり白き貝ありて砂丘にひるの風の冷たく
さまざまに過ぎ來し方も思ほゆれ青きあざみは岩の上に咲く

○　川崎　山内　照夫

まとまりし思ひなくして梅の木の朝影ひける庭に立ちけり
北窓の遠くに見ゆるかの丘に夜すがら紅き燈が點滅す
混凝土混和機のある工事場が雨降る午後の窓に見え居り

ひそかなる枇杷の落葉や私の歎きはかくて過ぎゆかんもの
をりをりに風の音する椎の木の黒き枝見ゆ窓のうちより
あきらめに似し思ひ湧く遠空は暮しづかなる色としなりて
吾が心たのみがてなく宵いまだ淺き鋪道を歩みゐにけり

長野　園原　寛美

○

夕まけて永き曇が晴れしかば枯山を吹く風の音する
月照らふ夜ごろとなりて家かげに消殘る雪も心にぞしむ
胃の痛み言ひゐし妻は傍に寄りて毛絲を編みはじめたり
勤め終へたちいづるとき枯山は赤々と日の延びしこの頃
いさかひて吾には物を言はぬ妻幼らにいたくやさしき聲す
幼子のあそびし積木かたづけて居りたる妻がひとりつぶやく
ひそまりて煙草卷きゐぬわが妻は頼み少き夫と思はむか
灯の下に美しき衣縫ふ妻の立ちあがるとき光る留針

盛岡　片山　新一郎

○

雪歩む猫ゐて筆のごとき耳立てつ寒けき曇り日にして
夕ぐれに行く荷車やむらさきの海栗の歩行のごとく豊けし
北窓に花やぐ白よさえざえとしたる空氣に雪は降りゐる
新聞紙しきて靴置く廊下より走る鼠の音は聞ゆる
彼の高き麥畑こゆる電線はよこゆれて風日すがら强し

藤澤　井上　雅道

○

昨日よりつづく寂じさ曇り日に埃をたてて風庭にふく
地下驛の入口は午の冬日さし渦を卷きつつ風が吹き去る
折々の風の中にて樫の枝もまれ居りしが夕暮となる
今しがた凝りしばかりの寒天を切り居り母の庖丁早く
今日ひと日幹ひかりたる林にて母と吾とは枯枝たばねつ
どうしても諦めがたき愛著のありてゆふべの街角に立つ
おぼおぼとくぐもる海の上の空淺黄いろにて夕暮となる
おのおのの立場にありて傍の女教員一人煙草くゆらす
朝の空かよへる風のきよき音その斷片は低く聞ゆる

岡山　長井　乙生

○

春いまだ寒きくもりに蠟梅の散りがたの花ただよふ如し
春ちかく雨しげき夜に霜やけの足をいたはる母と居りたり
わけて暗き冬の日ありて立枯れし莵麻のしげりが風に音立つ
人に向き語れることのいくばくか吾の思想とけじめもつかず
吾が店の資本不足を嘆く文書きたる後はひそむごとしも
この夜の虧けたる月は草なかに消のこる雪に照りぬともしく

千葉　林　愛子

○

午すぎの曇展くればわが待てる幸としいはん空の光は
短かかる日差し傾けば街の邊に光を持てるかの白塔よ
群鳥のかたまり飛びてゆく彼方あたたかき街のさまが美し
午後つひに雨となりしが一面に綿をひろげしごとき鈍き空
臥ねてゐる常の位置にて電柱は見えをり今日は雀もをらず
たまさかに起きいでて見る窓そとはあらはなる櫻の枝が茜す
柿の枝に朝さやかなる日差しにて淡き雲ゆけば心和まし
雪とけて光かがよふ土のうへに麥の新芽はいまだ幼し
日すがらの風にゆれゐる竹群の明るき反射窓にたえまなし

○

あたたかき靄のこめたる宵にして屋根より斑雪落つる音する
二三日暖かにして今日の午後きこえし蛙夜は聞えず
背戸山の木を伐りたれば花ふけて月は切株の上をてらせり
晝の間に伐り倒したる古杉のむささびの巣を思ひ出でをり
朝々の暗きに起きて秣飼ふ吾がかたはらに牛の息くさし
明時のくらき厨に音たつる妻は欠伸をしきりにもらす
三くりやの匂へる徑を通ひ來て日かげる畑に麥ふみてをり

島根　梅田　敏男

○

たどたどしきピアノの音は鳴りやまず人去りて又聞くとしもなし
淺宵に薪割りをれば傍の兎は眠りさまして騒ぐ
枯草の根もとにひそむごと萠えし綠を見などして憩ひをり
たまさかに晝を歩めば降る雨は服にこまかき露をとどむる
憩ふ間もなく事務をとる窓下に沈丁の花咲くべくぞなる
交りは淡々となほつながりて箱にいくつか手紙たまりぬ
眠らむとしつつ寂しも現身を虐げてわれ何を求めき

神奈川　飯田　厚子

○

あたたかき幾日續きて池水になびく藻草を吾は見て佇つ
悲しめる心ととのへむすべもなく窓に音して降る寒の雨
雨やみしのちいくばくか明るくて夕ぐれとなる空の藍いろ
埃立つ白き鋪裝路の兩側は霜溶けはじむ朝の谷中墓地
なづさひて雪立つらむか外の面には夕暮るるまで子等の聲する
暖かく曇りとならむ淺宵に蓋あけしクリイムの香に立ちてをり

東京　藤園　良子

○

西北風一日荒れつつ椎の木の木むらにあかく夕陽さしたり
埃立つ歩道をゆくに我いまだ辻り止めある下駄はきてをり
雪覆ひ除きし庭に際立ちて青々とせる柘植の一株
寂しさはおぼはれなくに黄昏の灯がつきぬ救ひのごとく
或時は心よろひて過ぎ來つつ遂には父母も恃めぬものを
風なぎて船も樂ならむといひながら人送りいづ十日月夜に
絶えまなく枕におらぶ潮鳴りに親しみし君世にあらず鳴呼
かがやきてたゆたふ朝潮戀ひたりし君し思へば我が胸つまる

函館　久保田貞子

○

あひ寄りてこの夜は雪の中をゆく海鳴りのおと高くなりつつ
海風は雪を搖きつつ吹き過ぐる夜のふけにして橋を渡りつ
別れ來し思ひはかなく夜のふけに汐のにほへる木橋渡る
春はやき紫尾の山ののぼり路に雪解の水の鳴る音きこゆ
春の雲筑波の山に片寄りてこの寺庭につむじ風立つ
松の木はおのおの長く影ひきて砂乾きたる寺庭を出づ
ひと冬の過ぎむとしつつ埃立つ街をかへりぬなほ明るきに

茨城　直井芳雄

○

しみじみと泪湧きて坐りたりかかる宵にも吾は一人居
慢らしげに米語を話す處女等の日浴むるわきを通りて出づる
ニコライ堂の鐘なる頃を屋上に憩ひたりき共に夕食を終へて
白々と雪明りして目覺めたる部屋に薪割る音のひびき來
日に反り入らなくなりしわが雨戸月夜の道に遠くより見ゆ

東京　伊藤幸子

少女のごとく小さくなりて病癒えし妻を抱きて今宵かなしも

○　川崎　春山　忠信

泥こねしごときホームの階をゆき水蒸氣たつ斷層が見ゆ
岬山の岸に滑空機格納庫枯草に道埋もれしまま
塵捨てし鑵鳴らし鳴らし歩みくる少年工の小さき反撥
日當りの車掌詰所に椅子出してギター彈きをり彼らのひと時
坂の上にかかれば列を返り見る交叉路にあり驅けるプラカード
まれまれに赤旗を振るビルデング感動もなく歩みをつづく

○　川崎　上原　照男

みぎはべに丸太を積みし舟ありて夕べ來たれば水の香りする
山頂に通ふきだはし登りつつ白銀色の港みえつも
兩側に木立茂れる坂の道のぼりきたれば黄の夕べ空
綿のごとき形のままに殘りたる炭火の灰をしばし見てをり
吸呑の野菜スープを啖ならし飲みゐる見れば心いたしも
厨子に灯のともりて書をかそかなりあまたみ佛立ち並びます
店先にさせる朝日につやつやと蜜柑の黄林檎の赤を盛りたる

○　川崎　加藤　八重子

しぶ柿の皮をむきつつ雨の日を部屋に籠りて一人留守居す
堆くつまれし砂利のひとところ霜とけそめて黑くひかれり
いねがたく夜半起きをれば水道の蛇口をもるる水の音する
かなしみの思ひ湧くごと道の邊に荒地野菊はむらがりて咲く
おとろへし冬日のかげと思ひつつ落葉の道を踏みて來にけり
落葉して枝あらはなる櫻木によりかかり居ぬこのひとときを
夜の明けを目覺めてあれば時をりに屋根の瓦の凍る音する

○　防府　松本　辰雄

うたたねに生汗かきて眠覺れば軟かき蜜柑一つ手に取る
雨だれの音繁くなる夜半過ぎて風出たるらし北窓の音
年齢の差意識にありて行動をためらひて居る君と向へば

○　長崎　市田　勝義

用もちて築地河岸に歩みきぬ芥ただよふあけ汐どきを
聲はりて唄ふあり無情に歩むありてデモ行進が街角を過ぐ
人のこむ書の銀座に今日も來ぬ何を買はむといふにはあらず
書ちまた今日も來たりてMPの交通整理を我は見てゐる

○　柏崎　片桐　熊吉

うしろより追ひ越して行く看護婦の髪の香にほふ朝の廊下に
拂下げの外套を着て歌の友丸山君は吾を訪ひきし
目覺めぬて何かわびしき曉の空渡り行くかりがねを見つ
畑隅に消え殘りたる雪塊は汚れしままに小さくなりぬ
療養所の裏をめぐれる道ありて山に行く人のをりをりに見ゆ
山ぞひの坂道下る靈柩車たちまちにしてかくろひにけり

○　東京　高橋　莊一郎

細雪懷しみつつ濠に沿ふ道を下り來暇ある今朝
長引かむ罷業に對し策を練る青年部會は聲荒荒し
夕驛に聲あげ居るに寄りゆきて運賃値上拒否に吾も署名す

○　土橋　東洋麿

散る葉なき冬木は枝を相打ちて吹きまく風になびきつつ見ゆ

木々の葉はみな散りつくし山肌のあらはになりて山の道見ゆ
竹むらの林にそへる冬川の水はやくして音のきこゆる
陽の光さしゐる冬の山岨におのづから小石落ち續くかも
をがせつける櫻の老木一木生ふる水邊に出湯ぬるくして湧く

○　北海道　鬼川　俊藏

わが思ひくづるる砂のごとくにもさみしかりけり海の潮ざゐ
なでしこに射して夕となれる日のはかなき思ひかきて送らむ
夕さやぐ枯あしむらにふる雪を見て立ちにけり淡きなげかひ
いきほひて落ち込む川のあるならむ沼面の上の水流れゆく
落ちてゆくわれの命の薄影に添ひゆくものもあはれなるべし

○　和歌山　小林　克郎

峠こえて日日往診す疎開してただに貧しく病む人のため
晝食後二回尿に立ちしのみ何もせざりし半日が過ぐ
雨雲のはれざるままに夕づけば淋し淋し無爲にすぎむ幾日よ
四月より幼稚園に行く子の鞄古ズボンにて妻は縫ひをり
朝の間に醫書二三頁よみたれば午後は薹たつ園の菜をひく
夕餉すめば直ちに眠る幼子よ寢間に電氣をつけよといひて
隣室より妻ミシンふむ音きこえいつか夕べとなれば灯ともす
寢につくと厠に來れば思はぬに雨はれて彼岸の月くまもなし
もの音のたえし夜ふけをさめをれば幼子が泣く夢におびえて

○　長崎　今宮　武雄

東京に近づく汽車に見つつゐて梅の咲く木の皆小さかり
黄ににごる空の埃を遠ざかりやうやくのがれきたる思か
武藏野に吹き立つ埃黄に見えて遠ざかるなり電車走れば
嵐の中を歩み來て吾が向ふ病み臥す君のかく靜かなり
風の音靜まりをりし曉に會ひまつる師を思ひつつぞゐる
翁さびたまひしかなや紺の胸當に白鬚長く垂りたまひたり
しばしだに心離れず御孫を呼びたまふなり語る間も

○　葉山　飯岡　幸吉

兩陛下葉山別邸に居たまへば火を警むる拍子木きこゆ
御用邸の松に子供の枝を折る乾ける音がここに聞える
簡單に濱邊に下りて味噌汁に入るる藻の類籠に拾へり
火葬場の灰を入札にするといふ新聞記事も心ひきたり
この夕べ横須賀線に劇團が持ちこむコントラバス太鼓等
エレベーターに一人乘るとき進駐軍專用車にゐるごとき錯覺
山羊の乳に蜂蜜まぜて友と飲む外の埃にバイヤーが立つ

○　佐藤　佐太郎

晩春

ゆく春の風さわがしく吹きてゐる夜しづまらん風とおもへど
見なれたる丘の家々ふきぶりの雨にぬれをり何れも古く
はかな事思ひて居れば晝すぎにをりをり風の集ふ枇杷の木
墓丘の木々の綠はしづかなる炎のごとく春惜しましむ
木々の若葉雨にゆらぎてかの丘は赤土の路特にぬれゐる

形式

（純粋短歌論 II）

佐藤佐太郎

一首短歌は詠嘆であり告白であることによつて、本源的に韻律を要求してゐる。生命の顯はれにはいづれリズムはあるものだし、生命を感ずるのはリズムを感じてゐるのである。短歌がもと唱はれたものだといふ、その名殘として韻律があるのではない。短歌の韻律といふものは人間に尾骶骨が殘つてゐるやうなものではあるまい。聲に出して唱ふ唱はないにかかはりなく、詩は韻律を持たねばならないものである。私はこの立場から詩の內在律說を重んじない。

短歌の韻律は五音七音五音七音七音と連續した五句三十一音の形式にある。作歌者はこの形式に據るといふことに總てを懸けてゐるものでなければならない。

詩の形式はいろいろあるから、勿論短歌だけが日本の詩ではないが、然しすくなくとも詩の一形式として存在を主張し得るものである。日本語は韻律的效果に乏しい言語だといはれるがそれが五音となり七音となる構造の中に韻律に對する要求が滿たされるので、五音七音といへば機械的な規定のやうにも考へられるが、これは日本語の性質に根ざすものだと信ぜられる。その五音七音の組合せが特殊な形で三十一音になつてゐるところに短歌の音樂的な味ひといふものがある。

遠い祖先によつてこの形式が發見され、以來今日まで踏襲されて來た事實は、一面この形式の優秀性を證明してゐるのだと謂つてもよい。言葉は時代と共にどんどん新しくもなり豐富にもなつたが、全體としてテニヲハを持つた日本語の構造の中に入つてゐる。日本語の構造が全く變化してしまはない限り短歌の形式は現在及び今後といへども民族にとつて疎遠な詩形であるはずはない。

短歌は五音七音の五句から成立つといふのは、約束された形式である。その詩形が自由でよいといふのは一面の眞實である。然し謂つてみれば形式に據つて作るのが藝術で、どんな種類の藝術でも形式を豫想せずに成立つものはないだらう。また、形式の抵抗によつて力を呼ぶことが出來るので、始めから拘束のない自由といふものは有り得るかどうかも疑問である。すべて表現は限定しようとする活きである、結晶しようとする意志を持つてゐる。短歌は私にとつて今日といへども不自然な詩形ではない。これは理論ではなく、さう信ずることによつて事實であり、そこから一首々々の力が湧くのだと思ふ。

短歌が僅か三十一音の詩に過ぎないといふ事を悲しい宿命

のやうに言ふ人がゐる。然しこれは宿命といふ筋合のものではあるまい。ただ事實であるに過ぎない。箒には箒の働きがあり、はたきにははたきの働きがある。はたきが箒の用をしないからといつて難ずるのはをかしい。短歌は短小な一詩形だが長所も短所もその事實のうちにあるといふまでで、詩が小說の代用をせねばならぬものでもなし、まして短歌が人間の表現をすべて孤りで背負つて立たねばならぬ訣合は全くない。もともと藝術の個々の形式はそれぞれ一を以て總てを滿たすといふ萬能性はないものだらう。ただそれに携るものが自から總てを托し得るかのやうに信じてゐるに過ぎないのである。

歌人が短歌だけを作つて、他の表現を試みようとしないと言つて暗に冷笑する人もゐる。然し思ふに、さういふ多力の論者は先づ自ら自在力を發揮して時々短歌をも作つてみるがいい。どの程度のものが出來るか、歌人を瞠目せしめるやうな實作を示してくれたなら私は喜んで冷笑を甘受する。私は人間の才能といふものをそれほど大したものだとは信じない私がかすかなこの一形式にすがるのは自らの非力を知るからでもある。

短歌の形式は如何にも小さい。然しこれは私の生命を托し得る形式である。人は字數が少いから、短歌は輕手工だといつてはならない。詩の言葉ははもともと計量を絕したものであるから。火に於ける焰、空に於ける風の如きものを私は詩として追尋する。それが現はれるときは詠嘆であり告白である。この事實の中に詩は直截に端的に行くのが最も純粹な形であるべき要約がある。

私の信念を卒直に言へば、短歌は五句三十一音によつて成立つ詩で、この形式を信じこれに從はねばならない。これは消極的態度のやうであるが、實は强い勇猛心がなければ能はぬところであらう。短歌に當然許される字餘り字足らずのやうなものさへも無く三十一音で行くべきだといふ風に此の頃私は信ずるやうになつた。整然たる形式といふものは何にしても大したものだといふ氣がしてならない。短歌はもつと純粹にならなければならない。その一面として詩形に就いても確固として熱烈な信念を內に呼びたてなければならない。

吹雪やみし夕べの空を鳶は舞ふ折々に空の青あらはれて

○　福島　諸岡ミチ

阿武隈の嶺をおほひて黒雲のひくき夕べは風疾く吹く

悔しみにみづからをせめゐたりしが又破れ残りの歌稿を讀む

○　愛知　青山八重子

嫁ぐ日の近き妹やすやすと眠れる見れば吾涙ぐむ

ひたすらに亡き母慕ひて雲のまも部屋にこもりて香たく吾は

夕べ生れし山羊のしきりになく聲し不安に思ひ吾は目覺むる

○　静岡　野崎島代

日暮時のかすけき光に照らさるる野草の露はかがやきゐたり

滿洲より歸り來てはや二年を經たり春たつけふの夕べは

○　島田　長瀬律子

誰がために生きなば足らむ紅のいまだふふめるそうび一もと

冷けき眼に會ひて再びは面を吾はあげがたかりき

○　長野　甲田初枝

療養所の窓遠く見ゆる森の上雲あらば故郷を思ふと言へり

慰さめむ言葉も絶えて君のため寢臺の傍にしばらくゐたり

○　愛媛　上田昭子

ととのはぬ吾が弟の片言を朝の床に目ざめききをり

山道に枯れ伏す草に日はさして小さき草の芽生へも見ゆる

○　帶廣　大津よし子

配給の煙草のみつくし吾が父はいたどりの葉を刻みはじめぬ

牛乳をのみつつおもふかの部屋に去年は病養ひをりき

○　奈良　元根蘆月

火入式ののりと終ればボイラーにたちまち石炭の炎はあがる

はた織機動くを見れば戰ひののちにけふありて涙ぐましき

糊付機の試運轉をする工員とよろこびあへり神酒をささげて

○　北海道　蛇川秀夫

夕ぐれの光あつまるごとくにて雪深き吾が村は小さし

やうやくに春來しかなと童子らの遊べる中に吾も入りゆく

○　愛媛　浦川雅晴

川岸に咲きたる花をけふ見たり汚き中に赤く咲きをり

いそがしく啼き交しゐる雀ゐてその低き木に陽は落ちんとす

落雷と思はるるとき電灯消え人の叫びのきこゆるしのみ

○　東京　櫻山忠男

川へだて見ゆる灯火は夕靄の中にうるほふけぶるが如く

黒雲のうごきつつゐる西空はたちまちにして夕輝きぬ

朝の螢研究〔一〕

橋　馨、關口登紀子
猪浦敏夫、佐藤武

○

淨玻璃にあらはれにけり脇差を差して女を
いぢめるところ

橋　馨）この一連を後年長塚節が子規の模倣歌であり失敗作だと言ひ、又作者自身、子規の歌の模倣から出發して居ると云つた然しこの作品を敢て自選歌集のトップに置いて居る事は作者がこの一連を相當重要視して居る爲であらう。佛蘭に疎い私には充分な批評は出來ぬが、この一首について云へば、「淨玻璃にあらはれにけり」と大膽に二句止に言ひ切つたあたりは一見唐突過る樣に思はれるけれど、この樣な特異な作品に於ては却つて效果的で、淨玻璃の鏡、即ち「淨玻璃」なる一の佛語使用が端的に效いて一層この一首を妖しく美しい作品にして居ると思ふ。結句の「いぢめるところ」の「いぢめる」の語・餘りにも俗な言葉で到底歌語としては使用不能とさへ思はれる「いぢめる」を持ち來たつて何らの破綻もきたさず、却つて武士と女の愛慾葛藤、それも「いぢめる」の語感より邪戀？ SADISM をさへ推想し得らるる程、淩婆の煩惱を「いぢめる」に依つて遺憾なく發揮せしめた力量に驚歎する。この歌が子規の「岡の上に黑き人立ち天の川敵の陣屋に傾くところ」などの全くの模倣であると「現代短歌全集第十二卷、齋藤茂吉集」の跋にあるが、長塚節が全くの模倣歌で價値が無いと言つた批評は當らぬと思ふ。

（猪浦敏夫）この一聯の連作が正岡子規の歌の模倣であることは作者自身が語つてゐるところで、著書「正岡子規」の中に「從來の歌以外にかういふ歌の境地もあるのかと思つた。そして時々模倣してさういふ歌も作つた」と記述してゐる。しかし乍ら一首一首は簡潔にして些かの無理もなくまとまつてゐる。

この一首もくどくどしい描寫ではなく、むしろ無造作すぎる程の客觀的な歌であるが、それでゐて寫象を鮮明に現はしてゐる點は、大きな手腕であると思ふ。

（關口登紀子）子規の竹の里歌の中に「木のもとに臥せるほとけをうちかこみ象蛇どもの泣きゐるところ」の歌があつて、これ以外に同じく結句「ところ」止めが幾つか見受けられる。朝の螢の著者はこれに就いて『「象蛇どもの泣きゐるところ」の句に淨着して實に驚歎した…「泣きゐるところ」…も寫生であつてよくその性命を捉へてゐる。同時に作者の氣持がいかによく表はれてゐるかに感歎し…云々』又「私は竹の里歌をよむやいなやかう云ふ種類の歌を好いた。…そして時々模倣してさういふ類の歌を作つた…云々」と云つてゐる。この歌は、「あらはれにけり」の詞句によつて淨玻璃と云ふものの性質を明確に表現し「見える」と言ふ樣な緩漫な狀態でな

く一段と切實なひびきを傳へてゐる。「女をいぢめるところ」は上句を具体視するに平淡簡潔なる描寫で「いぢめる」の如き普通民間で使ふ言葉を以てし、ここの處で一首を現實化せしめて言語上の工夫を試みてゐる。かかる圖を素材とした歌は兎角間接的になり平凡陳腐に陥るのを單なる外形模寫の型を破り、宗教的情操を基底とした感情的表現を以て流露せしめてゐる。「にけり」で簡潔に言ひ切り結句「ところ」で名詞止めとして一首の流動性を保有しつつ、句法の上の効果を收めてゐる。全体の感じはきはめてきびきびとしてゐる。

（佐藤　武）節が模倣を難じた點は、當時の節が作歌の上に抱いてゐた考へと照應せしめて理解せねばならない。しかしそれを認めた上でもなほこの模倣は、虚心に隨順すべきものに隨順したといふ感の深いものであつて、これによつて實作上の模倣と進歩の相關をも窺ふことが出來て有益である。一面また模倣といつても子規が常辱の生活といふ境涯から對象に投影してゐる心持の自立し得ると同樣にこの作者が佛教的雰圍氣の中に生を投射しようとした内部要求も亦それ自体として定立し得る境地であつて杵格のあるべき道理がない。さてこの一首であるが、既に各評者がそれぞれに言及してゐる如く、いかに對象に即して歌ふといふ態度が根本にあつたとしても言語の驅使がかう自在にはゆかぬのであるが、それを易々として遂げてゐる有樣は、これを同年代の他の作者の作品について檢して見ればよく判る。これを難じた節でもまた赤彦でもこの年あたりの作品は形式的固定が目立ち、かう傍目もふらぬ模倣をずばりとやり得なかつた。

○

飯の中ゆとろとろと上る炎見てほそき炎口のおどろくところ

（橋　馨）初句「飯の中ゆ」と六字句にして余裕を持たせて二首への移りに微妙なる含みを見せ「とろとろ」と實に妙妙な語感で「ほそき炎口」即ち咽喉が針の如く細い爲に飲食する能はず常に餓鬼に苦しむ炎口の餓鬼の姿態を余すところなく把握した手腕「とろとろ」と「ほそき炎口」の良き照應、常凡の徒では出來ぬ効果を上げて居る。

（猪浦敏夫）この一聯の歌を評して長塚節は「誰もこんなことを言はぬうちにこころみたといふなら嶄新といふ所に取るべき點もあるが全然模倣だから何らの手柄もない」といふことを言つてゐるが私はさうは思はない。模倣も完全に消化されたものであつて、この一首なども「とろとろ」と寫生のしかた又「おどろくところ」の言ひ廻し方などは常凡ではなく、かうした歌に於ける特殊性を實によく活かしてゐると思ふ。さうしてかういふ歌の陷りやすい説明くさがなく、周到な觀察と理智的な手法とが相伴つて素材を一層印象的に打出してゐる。

（關口登紀子）この歌に於いては、もはや地獄圖の單なる模寫ではなく「寫」の中に表現と象徴化との結合を感じる。圖に表はれた各現象に素直に順つてその實相を凝視し、捕捉して現はすべきものを現はし得てゐるかの樣である。そしてこれ等は視覺が主になつて構成された作品であるので、印象的に直接に目に浮ぶものがあつて

解りやすい。作者自身の感情をその對象の中に投射してそれを更に觀照するだけの客觀性があつて、しかも一首の中にはゆたかな抒情性を含んでゐて「赤光」特有のロマンチシズムにも通ふものだ。その表現は現世的で氣取りがなく「飯の中ゆ」と字余りで言ひ出て、「とろとろと」の如き平俗形容語を交へても滑におちることなく、だらだらとせず、緊張した聲調を保つて直線的によみ下して名詞止めにしてゐる。「とろとろと…ほそき炎口」等のするどき直觀を以て理論を交へずして把握した素材を、感性のある描寫を似てし、この一首になまなましい實感を與へてゐる。

（佐藤　武）はからずもここで聯想がダンテの神曲地獄篇に及ぶその中にも苦々は地獄圖的描寫を見るけれどかくの如く印象鮮明に迫つて來る集中がない。すべてが思量的技巧の産物のやうに思へるそこからは表現の表からも裏からもかほどに生々しい作者の息づかひを聞くことができない。西洋的表現だからそうであるかといふにたとへば往生要集あたりの究明な描寫からも、意圖を感じて白々しくかくの如きせいせんの氣を感じない。

つまりこの一首から傳はつてくるものはもつと切實で、現世のことではないのに拘はらず却つて婆婆的である。一首短歌と長大叙事詩とのこのへんの差別を短歌排撃論者らは如何に解釋するか、貶しめて足れりとするだけでは解明できないものである。序でを以て云。この「ほそき炎口」は「炎口餓鬼」のことであるが、炎口餓鬼といふのは「偽説救拔炎口餓鬼陀羅尼經」の所出だといふことだ。その姿態については橋君の言及した如くである。

○

赤き池にひとりぽつちの眞裸のをんな亡者の泣きゐるところ

（橋　馨）一首中に「の」が三つも有るのが氣になる。「ひとりぽつち」の俗語が「眞裸の女」を强調して居る事は勿論だが、同時に「赤き池」即ち血の池の凄愴な場面を一層効果的ならしめて居ると思ふ。然し比較的平凡と思ふ。

註「ぽつち」現代短歌全集には「ぽつち」となつて居る

（猪浦敏夫）私は地獄極樂圖といふものを見た事がないので先入觀といふものを持つてゐないのであるが、一首の構成によつて印象的に浮かび上つて來るものがある。そこが作者の手腕であると思ふ「の」を幾つか綴けて來て「ところ」と結んだ工合は、子規の前例を承知の上でも少しも嫌味を伴はない。

（關口登紀子）「赤き」と云ふ平凡な色彩感が、こゝでは印象的に鮮明な感じでこの言語で一首が生きいきして來る。「ひとりぽつち」と言ふ平俗語もよく利いてゐて、作者の魂の深いところを潜つて出て來た言葉のやうに思はれる。この二三四句には、對象をよく現實化しその現實の閃きを攫んだ作者の獨自な表現もしくは用語を點出させてをり、其處に作者の個性が光つてゐる。結句には誇張でなく、一首の内容としての哀傷が直接にひしひしと傳つて來るものがある。ただ事におちず、卑俗でもなく、赤光の世界に於ける藝術的な存在として單獨に抒情詩と云ふのみならず、世界觀的、哲學的

たらしめる基本性格がひそんでゐる。深紅の炎が内に潜められてゐるかの如く青壯年期の作者の衝迫が感じられる作品である。

（佐藤　武）　地獄極樂圖そのものが原色的壓感的であり、從つてこの一連からもそれを感じ得る。この原色的だといふことは恣に意味を擴張してゆくとこの作者の一特色をなすものであつて、つまり原始的で渾厚であるといふことになる。「赤き池」といふ語から受ける感覺もこの場合塗りを重ねた厚い色をおもはせてさへぎることの出來ない直接性がある。

○

いろいろの鬼ども集りて蓮の華にゆびさす

ところ

（橋　[illegible]）　地獄に居る衆生の煩惱罪業を持つ陰なる死靈の鬼どもが集つて蓮の華なる極樂淨土。圓滿無欠自由安樂の理想郷を指さす象徴歌で有る故其の象徴を深く味はふべきであると思ふ。「華に」の「に」が特殊であり一首が緊められて居る。「いろいろの鬼」と有るので赤鬼青鬼等色により佛教上特別なる意味を持つものと思つて居たところ、色は只色彩上赤（陽色）青（陰色）とつけたもので色に特別な意味は無いと松浦一教授の御教示を得た。

（猪浦獄夫）　「いろいろの色の鬼ども」といつたところは正岡子規の「涅槃繪」の歌の中で「象蛇ども」と言つてゐるところと一脈通ずるものが感じられる。「蓮の華に指さす」といふ現實的な言ひ方で全体を引きしめてゐて鬼と蓮の對應が不自然でない。

（關口登紀子）　卒直端的にして一讀情景がはつきり分かる。言葉を玩ぶことなく直截に表現し得て、複雜な感動の中から中心的な部分のみ把握されてゐる。「いろいろの色」とか「指さす」と云ふ平易な世間的用語を使つてゐながら洗練された高度の藝術性を依持した作品である。「蓮のはなに」の「に」の助詞一つにも作者の微妙な心づかひがあつて一首の意味あひに必然性をもつてゐる事など學ぶべきだ。當時新派歌壇が「理想」だの「浪漫」だのを唱へてゐた際に、一方で以上四首のやうな、容體を容體としてありのままを詠む、現實を基礎とした寫生の歌が作られてをり、これは一見平凡で物足らぬ樣だが、事象の變化とともに限りなく變化するものであるからいつまでも飽かない滋味のある歌であつた。かかる和歌史上の業績も改めて考へて見なければならない事と思ふ。

（佐藤　武）　「蓮の華にゆびさす」といふのは、墮獄の苦惱者に淨土の彼岸を見しむる構圖であらうか。それによつて條件反射的に苦痛の度を加へようといふのであらう。しかし一首は特に象徴を狙つたといふものではなく、やはり客觀的に地獄圖の一相を描きつつ作者の咏歎をこめてゐるから、おのづから象徴的味はひを持つてくる筈である。本集には、なほ「ところ」止の歌がある。「みづゆけば根白高萱かやむらは濕れつつ蟹を棲しむるところ」の一首であるがこの「ところ」といふ結句は、すでにこの一連の「ところ」とは異る韻調を以て、その一首の中に位置してゐるやうにおもふ。地獄極樂圖一連の歌からこの一首に至るまでに作者は八年を閲してゐる。このことも吾々は輕々しく看過せぬ方がよい。

最近の歌界作品について

田中　仁

最近の歌界といつても筆者の觸れ得た極く小範圍の作家と作品について氣のついた二三の點を述べるまでである。

○

「アララギ」の一月號に土屋文明氏が作品五十三首を發表せられた。土屋氏今回の作品は歌壇的にもかなり重要な意義をもつことと思はれるので、若干の考察を試みたい。

次の四首は集中で特に心ひかれた歌であつた。

すき透り枯れたる蓼何々かやさしき冬の芽のととのひて

冬の夕べ溫かにして霞まむと柿の木末の柿の蔕ああ

冬はやきふきの薹をも我つまむ老いたるものは香をかぐはしむ

白妙の雪ある嶺もにほふまでしづかなる天の夕暮となる

曾て私は土屋氏のある時期の作品、例へば「六月風」中の「走り來る丸鋼の赤く燒けし殘像がまたよみがへる如し今宵も」などを讀んで非常に困惑したことを覺えてゐる。當時の土屋氏は新即物派などと評された如く、實に歌のために苦しんでをられた最中で、短歌の新領域の擴充に無讖砲な位に努力されてをり、一面からいへば最も個性的な活動者ともいふべきものであつた。然しながら當時の文明作品はいまだ完成への深みと幅の乏しさが感じられたのである。あるときは餘りに理性的な方法が勝ちすぎて素朴な抒情詩としての短歌にはかへつて逆效果を生むといつた傾向もしばしばあつたように思ふ。

さて、今回の作品はさういつた時期からすでに十年以上を經過したものであるが、實は私はある種の畏敬を感じて讀み了つたのである。簡單にいふが、最近の土屋作品の特徴の一はその全作品が、極めて自在自由な發想によつて出來あがつてゐるのである。この自由な發想とは單なる材料、言葉の新しさで無く、その抒情のし方が高度に自然に行はれてゐることを指す。もうひとつ、最近の氏は終戰以來、鄕國群馬の山谷に歸住して、農耕に從事されてゐるが、氏はあく迄も一人の生活者として、現實に即して眞實を探らうとする執ようなまでにすさまじい生活方法の深化徹底ぶりを歌の上で示されてゐる事である。そして以上の二點が、誠に見事なまでに渾然とした基盤となつて、最近の土屋作品に具體的に現れてゐるのである。私は現代短歌の少くともひとつの姿の不易の場を建立したものは文明氏ではないかと思ふ。とまれ、私達はこの際、一應過去になつた血ぬられた文明短歌の澎大な犧牲蓄積を回顧する必要もあるように思ふ。

氏今回の作品は何れも老境に近づいた歌人の、しづかなあたたかな心を直に感ずることができ、洗練された技巧と充溢した感情が實によく調和されている。大正十二年芥川龍之介が『土屋は天下の歌人中最も完成した一人ではない』が「ふゆくさ」は一卷の中に幾つかの殼を破つてゐる」と書いてゐるが、恐らく土屋氏程多くの殼を破つたと思はれる歌人は見當らないのではあるまいか。私は今回の作品など歌界にとどまらず、ひろく文壇の人々にも注目されてよい作品だと思ふものである。

○

「短歌季刊」第三輯について、

東京近邊在住の各派の代表作家約五十名を會員として、一應クラブ的性格のもとに發足した東京歌話會の機關誌「短歌季刊」の三册目が出た。讀後感を簡單にいふと、私は又は失望を滿喫させられたといふのが本當である。あらかじめ承知はしてゐたものの現代歌人の氣力の無さを今更乍ら克明に見せつけられた感がした　雜誌の最初から終りまで整然として並んでゐる名前はどれもこれも一二册の著書あり、雜誌の選者といつた顔ぶれである。　ところが今回の作品を讀むと、二三の人々を除いては餘りに低調淺薄、殆どがくだらないの一言に盡きるようだ。一口にいふならば彼らの創作態度乃至生活態度そのものが　當然さうあるべき短歌創作への情熱を不足させてゐるのではないかと思ふ。

皮剝ぎを賣らむとしつつ路傍にて大根の皮長く剝ぎたり

高　木　一　夫

點きにくくなりしライター二つもちライター屋を圍む人の後に佇つ

長　谷　川　銀　作

櫓よ櫓よ六十石といふ容積をわが觀念はとらへがたしも

大　橋　松　平

籬ごしふれ來る聽けばけふまたも冷凍の鳥賊の配給ですといふ

中　村　正　爾

私は自分をも含めて、眞に一首の歌の創作に骨を折る、さういつた人々にのみ同情と尊敬を感ずることができる。

今回の「短歌季刊」にしても餘りにみじめな歌が多すぎた。同誌の歌でよい意味で注意されたといふ作品があつたら誰かに私は教へて頂きたい。

○　熊本　廣　瀨　百　枝

山茗荷咲く古里を離りゆき何時の日癒えてわれ歸り來む

六十九歳の母よ七十四歳のちちのみよ必ず癒えて吾歸り來む

療養所に今日入るわれや馬車の上ゆ紅淡き合歡の花見つ

決められし枕頭臺にクリーム置き胡麻團を置き萬葉集を置く

これは雜誌「アララギ」一月號其三へのつたもの、とに角私は心をうたれたのである換言すると、作者の眞實の聲が實に目然に現はれてゐるので、それが直接にひびいてくるように思ふ。表現も一見素朴のようでも、内部燃燒が完全に行はれてゐるため病者には稀に見る健康的な調べになつてゐる。

永言社近刊

土井虎賀壽著
ゲーテと茂吉を結ぶもの
予定價送料一〇〇圓

鹿兒島壽藏著
歌集　求　青

山口茂吉著
歌集　高　清　水

極點

一首の短歌にただよふ雰圍氣といふものは極めて重要なものと考へるのであるが、雰圍氣とは一首の短歌にただよふ氣分といふ風に考へて差支ないものと思ふ。一首或は連作の歌にこの雰圍氣が濃厚であればある程、一首或は連作の歌は力を伴ふといふことが出來る。この雰圍氣の源泉は、實相觀入であり眞實の感動であらねばならぬ。私は歌を鑑賞する場合には必ず雰圍氣如何といふことを考へる、そして雰圍氣を伴はないものに價値を認めることは出來ない。この事は歌を鑑賞する態度として當然のこととも考へてゐるが、顧みて自己の歌を批判檢討する場合には仲々困難な問題で、ここに私の作歌進展上の惱がひそんでをる。短歌に雰圍氣が釀し出されるといふことは極めて自然にさうならねばならぬ。そのためには純粹な感動に立脚した作品でありねばならぬといふことになる。一首の歌乃至連作の歌をなさんとするに當つてややともすれば既に不意識の中に一つの雰圍氣をつくつてをることがあり、その雰圍氣に賴つて作歌するといふ根元的の誤をなすことがある。言ひかへれば一つの歌境に處し一つの事象に向つた場合意識せざる意識が先行して勝手な雰圍氣をつくりあげ、その雰圍氣の中で作歌する樣な場合が多いと考へられる。そうして出來上つたものには純粹性がなく從つて力がないといふことになるのであらう。いい氣になり調子に乘つて作歌する處に態度としての甘さがあるのであり、根元の態度に甘さがある故に實相觀入が出來ない、眞實の感動に觸れ得ないといふ結果を招來する。かく考へるとき作歌者としての自己批判の態度こそは作歌の根元となるものであり極めて嚴正峻烈なるべきものである。この根本問題を解決し得ない限り私の作歌進展は望むべくもない。雰圍氣の語を以て自戒の一文とした。(今宮武雄)

悲劇は「正當なる理由により我々に好ましからざる如き一切のもの——かくの如き意味に於ける惡を表現する」とブレンターノは言ふ。そこで人間惡にどう對するかといふことが態度として大切な要約となる。唯今偶々の機緣により地獄繪に執して言ふから、源信の往生要集を顧るが、その八大地獄の精細な描寫も、現實の否定から出發してゐる。否定からのみ淨土への途が導かれることを期待してゐる。「朝の螢」の「地獄極樂圖」一連は、かかる意圖ある構圖に對しながら、地獄圖を通じて表出されてゐる人間惡をけつして否定的に取扱はず、客觀的に、非遠離的に現實的に取扱つてゐる。つまりその作品の中に「惡」を嚴乎として存在せしめてゐる。「曉紅」に、「十數年過去にならむか吾が歌集を悲劇的なりと云ひたまひけり」の一首がある。「地獄極樂圖」の作者はその作歌の全プロセスを通じて内に向つても外に對しても、この根元的出發點に立つてゐる。吾々は今日目前の惡に如何に對してゐるか。一度自らの傷痕にも觸れて見るがよい。

(佐　藤　武)

歩道歌會、毎月第三日曜日午前十時より、港區青山南町五ノ九〇
佐藤佐太郎宅（都電　青山四丁目地下鐵　外苑前下車）にて。作品一首、第二日曜迄に發行所宛送附。

後記

○「歩道」もいよいよ本號を以て新段階に入つたわけで、これは會員諸氏の熱意によつて到達した當然の段階である。私の見解と身邊の事情からこの事は遲れて漸く今日實現したが、かうなつたからには私も「歩道」のために全力を盡し、將來の發展進歩を誓つて勉强するつもりでゐる。この新段階を踏切として私たちの作歌は一歩前進しなければなるまいそれは「寫生」と「萬葉調」とを根幹とした抒情詩としての短歌の進むべき道に立つて一歩を進めるのである。私たちはこの根本覺悟について動搖があつてはならない。短歌のやうな詩の制作はどこまでも各自の内部的要求と發明によつて進展するものである。ただ私たちは、信を同じくする事によつて大体の進路が一致するだらう。ここに雜誌刊行の意義を認め、樂しみを分ち合ふといふ事にもなるのである。會員諸氏は各自に「歩道」を自分の雜誌と思つて、同志として作品行動を推進していただきたい。これは從前と同じ事だが新發足に際して特に强調したいので一言する

○　新發足に當つて、齋藤茂吉先生から近作五首をいただき、新村出先生から文章をいただくことが出來た。無上の光榮として感激を禁じ得ない。殊に齋藤先生の御作中に、

『あつまりて歌をかたらふ樂しさはとほく差しくる光のごとし』といふ一首のあるのを私たちは心を熱くして銘記したい。私たち信を同じくするともがらは相共に樂しく短歌の大道を歩まう。小さい一雜誌ではあるが强く搖がない信念を誇として。（佐藤佐太郎）

○　本誌刊行の經過については今までにあらまし御報告申上げた如くであつて、會員諸氏の御支持、御協力は甚だ積極的で、特に病氣療養中の會員が、新會員の勸誘は固より經濟的負担まで申出られ、事務を担當する私は屢々感動せしめられつつ事に從つた。お蔭を以て六十餘名の新會員と基金若干の積立を爲し得て、ここに新出發の初號をお送りすることの出來るのは喜びに堪へない。

○　別項記載の如く今後は相當數會員のゐる地方では、その中心となるべき方に實行委員として參劃して戴き、支部を結成し發行所との連絡を一層密接にすると共に本誌發展の基盤としたく考へてゐる。既に茨城縣那珂郡村松晴嵐莊に於ては芝沼美重氏が中心となり支部を作つて歌會の開催、藏書の開放等活潑に活動を始めて居る。

○　四月十日迄に特別維持會員として御協力下さつた方は三十五名に達し、同じく維持費醵出を得た方は次の各位である。記して厚く御禮を申上げたい。

橘　馨、小川庄之助、長井乙生、直井芳雄由谷一郎、井垣春太郎、伊藤幸子、市川せい子、今宮武雄、大川益良、黑岩二郎、關口登紀子、山本成雄、高山靜子、松本辰雄市田勝義、吉田美惠、田中仁、角田智、高橋莊一郎、外池喜代子、菅原峻、石黑植吉羽藤隆保、長坂梗、吉田わか、石川一夫、安永弘、隱岐喜太藏、秀島はつ子、鬼川俊藏、飯岡幸吉、芝沼美重、佐藤武、某氏等三十五名である。

尙記載洩あるやも圖りがたく御氣付の向は御申出願ふ。

○　會費未整理の方は取急ぎ御拂込を願ひたく、又維持費の分に應じた御醵出については引續き御配慮に預かりたい。（佐藤　武）

歩道短歌會規定

一、本會は歩道短歌會と稱し「寫生」を根本信念として短歌の研究を期する。

一、本會は每月一回雜誌「歩道」を發行し會員の作品及研究發表の場とする。

一、本會に編輯及實行委員を置き、委員は會の經營竝に雜誌の編輯に當る。

一、本會は各地に支部を置き、その地域の實行委員がその世話をすると共に發行所との連絡に當る。

一、會員は本會主催の會合に自由に出席することが出來る。

一、本會の會費は當分の間、特別維持會員月五十圓、普通會員月二十五圓とし四ケ月分以上を前納せられたい。

一、本會への入會は規定の會費に略歴を添へて發行所宛申込まれたい。

送稿その他の規定

一、會員は每月一回短歌二十首以内を送稿することが出來る。

一、締切は前々月の十日までとする。

一、歌稿は次の樣式により、なるべく原稿用紙を用ひ、二枚以上に亘るときは右上端を必ず綴ること。

月號歌稿（欄外朱書）

○縣（市町）名　氏名

○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○
一行あける
○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○
一行あける
（なるべく二十七字以内）

住所　氏名

一、原稿の文字は楷書、變体假名を使用せず特別の訓み方ある文字には平假名にて振假名を附すること。

一、送稿、送金は必ず發行所宛とすること。

一、入會、送金、送稿等の問合せは返信用葉書を必ず同封のこと。

歩道　更新第二號

昭和二十三年五月二十五日印刷
昭和二十三年六月二十日發行

定價 二十圓

編集兼發行人　東京都港區青山南町五ノ九〇　佐藤佐太郎

印刷所　東京都港區麻布霞町一七　株式會社 日新印刷

發行所　東京都港區麻布笄町六四　歩道短歌會